

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 09 月 05 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	井上 漱太

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
ポルトガル Serra D'Arga
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生馬の行動研究, Behaviour 2017 への参加及び発表
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 5 月 11 日 ~ 平成 29 年 8 月 9 日 (90 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター平田聡教授
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回のポルトガル渡航は 3 回目だった。2016 年におこなった 2 回の渡航はどちらも 3 週間の短期の渡航だったが、今回は 3 ヶ月の本格的な調査だった。前回に引き続き私の個人的な研究課題である群内の個体空間配置を把握するためにドローンを使用し、上空から動画を撮影した。目標は 1 雄群 2 グループ、2 雄群 2 グループ、それぞれ 15 分動画 100 本だった。しかし、1 雄群のデータは集まったものの、2 雄群のデータは予定の半分程度しか集まらなかった。7 月に入ってから気温の上昇とともに活動量が減り、休憩時間が長くなったことが理由である。休憩中はほとんど動かないために同じ配置を複数撮影しても意味がない。そしてもう一つの理由は対象としていた群が発見しにくくなったことである。実は 7 月 8 日に当調査地に入った研究者はいなかった。したがって、この時期の様子がわからなかった。5 月から雨が少なく、明らかに植物は枯れ、資源の枯渇がウマの分散を引き起こしていると考えられる。当調査地周辺には他にも山があり、そちらの方へ移動しているのだと考えられる。しかし、天敵であるオオカミからの捕食圧が高まるとも考えられ、資源と捕食圧のトレードオフになっている可能性がある。</p> <p>仔馬出生率の低下も確認された。その一つの原因は去年起きた山火事であろう。山火事の影響は広範囲に及び、一面真っ黒な状態になっていた。親の栄養状態が悪くなったことは容易に予想できる。先行研究では成熟個体の栄養状態が悪化すると、仔馬の性比はメスに偏るという報告もある。当調査地でも確認する必要がある。さらに、仔馬の死亡率も高かった。オオカミの研究者によると、恒常的に生息しているオオカミは一群れだけであるということだったが、それにしても死亡率が高い。恐らく、餌を獲得するために遠距離から出向いてきているのであろう。このような状況で、ウマたちがどのような戦略を適用するのか楽しみである。</p> <p>今回の渡航の大きな進展としては糞サンプルの収集である。主要な群れの個体のサンプルはほぼ全て集まった。DNA を用いた血縁解析を進めることができれば、間違いなくどんなテーマにも大きな影響を与え、考察が進むだろう。この DNA 解析はポルト大学のオオカミを研究しているラボと共同研究という形でおこなわれる。</p> <p>今回の渡航では、5 月から 7 月下旬まで調査をおこない、7 月 26 日より PWS 自主企画という形で数名の PWS 履修生が当調査地を訪れ、ドローンを使った実習や糞採集をおこなった。私はその企画のオーガナイズを担当した。日程決定、内容、経費、安全管理、実際の指揮など勉強になることは非常に多かった。肝心の実習では、複数のドローンを同時に飛ばし、広範囲の動画を撮影することにチャレンジした。動画の一部をオーバーラップさせ、距離の測定に利用できる映像を目指した。しかし、ドローンの運転初心者には意外と難しく、地理が頭に入っていないこともあって開始直後はなかなかうまくはいかなかった。操作に慣れてくると、何本かきちんと撮影できたので、それを今後の研究に繋げていけたら良いと考えている。</p> <p>PWS 自主企画が終了後、エストリルに移動し“Behaviour 2017”に参加した。400 を超えるポスター発表と多数の口頭発表がおこなわれ、分野も非常に広範囲に及ぶものであった。それゆえ、動物種も多岐にわたり、普段触れることのない分野の話聞くことができ、刺激を受けた。私にとっては初めての本格的な国際学会であったが、緊張することもなくポスター発表を遂行することができた。</p>
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

日頃からポルトガルでは英語で会話していることが大きな自信となったのは間違いない。私の発表を見に来てくれた人の多くは、ドローンの使用に興味がある感じであり内容への踏み込みは少なかった。似たような研究が少ない分、わかりやすく伝える努力が必要だと感じた。また、論文になっているのか、という質問もあり論文化する努力を日頃から怠らず、競争意識を忘れてはいけないと痛感した。大会そのものに関しては、少し規模が大きすぎて、同時に聞きたい発表があるなど、少し効率的に発表を見て回るという点では課題が残った。次回大会”Behaviour 2019”はシカゴでおこなわれるということだが、是非参加したいと思えるような大会だった。



ドローン使用中の調査風景



ウマ会議にて

### 6. その他 (特記事項など)

本渡航をサポートしてくださった PWS、調査でお世話になった Montaria 住民、ヴィアナドカステロ市に感謝申し上げます。また、今回は自主企画も兼ねていたため、PWS 支援室の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。